

### イベント記録

## スペシャル対談 西炯子×竹宮恵子 「竹宮恵子 カレイドスコープ 50th Anniversary」展イベント

イベント再録

「竹宮恵子カレイドスコープ 50th Anniversary」

展関連イベント

スペシャル対談 西炯子 × 竹宮恵子

日時 令和元年 7月 20日 (土) 14:00 ~ 16:00

場所 京都国際マンガミュージアム 多目的映像ホール

出演者:西炯子(マンガ家)・竹宮恵子(マンガ家・京都精華大学マンガ学部 教授)

司会:倉持佳代子(京都国際マンガミュージアム 研究員)

構成・担当編集:同上

(倉持) 今日はたくさんの方にお集まりいただき、定員を超えて230名超入という満員御礼ぶりです。ありがとうございます。今日はお二人の出会いの話から最新のお仕事まで、いろいろ伺ってこうと思います。改めてどうぞよろしくお願い致します。

先生たちから、皆さまにまず一言ごあいさつをお願いいたします。

(竹宮) 今日は曇りとはいえ非常に蒸し暑い日に、いつもよりも多い数の方がお集まりいただいたので、大変ありがたく思っております。

もちろん、それは対談相手が西先生だからということもあるでしょう。私と西先生の関係に関しては、いろいろなところで書いたりしているのですけれども、現在、私が半分リタイアしている状態で、あまりマンガを描いていないということもありますので、それについて知らない方も多いと思うので、今日はそういう意味で珍しいお話ができるかもしれません。過去に西先生にはひどい言

葉をたくさん投げ付けていたということを見ていただくことになると思います(笑)。それも含めて楽しんでいただけたらと思います。今ではむしろ西さんが現役バリバリな状態ですが、そういう方には私は先輩だというだけで色々なことを言ったのだなという証拠が残っております。それが一番怖いことだなと思うのですが、楽しんでいただくのが一番かなと思いますので、よろしく願いいたします。

(倉持) ありがとうございます。西先生は今日ミュージアムに初めて来られたということもあります。ごあいさつも含め、ミュージアムに来ての感想なども伺えればと思います。

(西) 皆さん、初めまして。西炯子でございます。本日は久しぶりの京都で20年ぶりくらいになりまして、ミュージアムができたのは知っていたのですが、こんなに立派なものとは知りませんでした。先ほどご案内いただき、地下にもなるほどの資料があることを知りました。多分、世界的にとっても重要な博物館になっていくのだろうな。とても感激いたしました。本日は京都まで来いというので、何で叱られるのかなと、私は何をしたらいいという感じで来ております(笑)。よろしくお願い致します。

(倉持) ありがとうございます。お二人のやり取りの証拠を今日は用意してきましたので、それらを見ながら、色々お話をうかがえればと思っております。なので、冒頭、私からの話が長くなってしまうのですが、ご了承ください。

お二人の出会いについて紹介いたしますが、『JUNE』という雑誌の「ケーコタンのお絵かき教室」というコーナーがきっかけでした。『JUNE』をそもそもご存じないという方もいらっしゃる

思いますので、簡単に説明しますと、1978年に日本で創刊された、主に少年愛や耽美的な作品を扱う雑誌で、今でいえば、BLの専門誌のようなものだと思っていただければイメージしやすいかもしれません。とはいっても創刊時はもっとテーマも混沌としたものでしたし、当時は「BL」というジャンルそのものが確立していなかったので、そうしたジャンルの先駆けの一つになった雑誌、という説明するのが正しいかと思います。

この雑誌に、竹宮先生は創刊から長らく表紙絵を手掛け、作品も寄稿されていました。その一つに1982年の1月号から「ケーコタンのお絵かき教室」という連載を開始しています。これがその第1回目です。最初はイラストコラムのような形で、「くちびるバリエーション」、「キスへの成り行き」、「着衣の効果」など、『JUNE』らしい色っぽいテーマでその描き方や表現のコツを指南されています。【図1～3】

それが1985年から、「実技添削指導編」として、投稿作の講評が始まります。初回には右下には鳩山郁子先生の投稿作も。このコーナーには西先生以外にも錚々たる方が実は投稿していました。【図4】

そして、これはこのコーナーでは自由投稿のほか、条件をつけた課題作も募集し始めます。1985年1月号に発表された課題では、「キスの前後」をテーマに8ページのマンガを描きなさい、とあります。もう少し詳しく条件を読みますと「キスに至るまでの過程とその瞬間、その後を刺激的にまとめ、登場人物が語り、年齢、場所、時代などを工夫して説得力ある名場面を作ってください」とあります。【図5】

これに投稿したのが西炯子先生だったわけです。ペンネームの「炯」の字が違いますが、1985年3号の講評に17歳の西先生が登場しています。冒頭のページなのですが、竹宮先生が「はっきし言って不作」と怒っている中に、西先生の作品が最初にバーンと登場し、17でこれなら面白そうね。大胆さはそのまま。もちっときれいに描いてよ、せっかくの少年を。キスの前後の

応募作としては秀逸でした。Bと評価されています。【図6】

以降、西先生の投稿が続いていくわけなのですが・・・今回このイベントのためにその軌跡を追いましたが、何とも竹宮先生のコメントが辛口なのに驚きまして(笑)。こんなに厳しく言われているのに、西先生、よく投稿を続けたなと思ったほどです。

次の号の1985年5月号で、「刃(は)」という作品が投稿されていますが、竹宮先生のコメントを見ると、

エーイ、キャラの区別はつかんわ、デッサンは狂うわ「作品を読む」以外のことに気をつかわせんでくれ！モンダイのキス・シーンそのものはカットとしてキレイだったけどね。他の部分にも、もう少し熱心になってほしい。変にイロっぽい呼吸を感じさせるんだよね、キミの作品は・・・

— C

とあります。【図7】

(竹宮) なぜかCなのです。点数が厳しいところもありますよね。

(倉持) 褒めているのでこれはいけると思ったらC(笑)。西先生の投稿作はここでは表紙絵だけ載っていますが、めちゃくちゃかっこいいし絵が上手い。Aじゃないの？って思っています。

(竹宮) はい。だから、本当に描きたいことというのが、私にはちゃんと分かる。でも、他の人には分からないだろうというところで、減点されてしまうのですよね。私には伝わっているから、逆に低くなってしまいます。

(倉持) なるほど。わかるからこそ厳しくなる。もうちょっと竹宮先生の辛口コメントを紹介しますね。さらに次の号、7月号には「前線にて」という作品を投稿しています。何か知らんがわからなくてイライラする。説明不足。あいかわらず一瞬いい絵を見せてくれるんで、つい選ぶんだけど

## Records 2019

絵から判断するに、性格が破天荒すぎておさまりつかないかしら？妙に耽美的ではあるんだけどなあ。- C +【図 8】

厳しいですが、期待していたのだなということがわかりますね。これは 11 月号の「お絵かき教室」の冒頭ページで講評欄ではないのですが、名指してコメントが入っています。期待の西桂子さん、最初の勢いがなくなってるよーしたの？イシキしすぎ？

個人的にエールを送っています。竹宮先生の期待の大きさがうかがえますね。

その後も、いつもの色っぽさが今回は少ない。C など、厳しいコメントが続いていくわけです。エールを送りつつ、辛口講評は続いていきました。【図 9・10】

当時は、竹宮先生もマンガを教えるということに試行錯誤されていた時代だったと思うのです。どう教えたらい作品が出てくるかということを考えて、時には自身でお手本を示して指南していくというところもこのコーナーの面白い点でした。不作が続いているので、次の課題発表ではもっと投稿者のレベルを上げるためか、「いつ、どこで、誰が、なぜ、どのように、何した」というのを自分で設定する「フリー競技」と、「いつ、どこで、誰が、なぜ、どのように、何したか」を細かく設定した「コンパルソリ競技」の2つの課題を募集しています。後者は、例えばこの回では、「秋、体育祭が終わった後くらい、運動部の活動が終わった後…」など、かなり限定した条件にしています。そのように舞台を設定してどんな作品が出てくるかというようなことを課題にしています。さらには、先生が「演出とは何か？」について「再考うながし講義」として、誌面上で講義もされています。

【図 11・12】

次の課題にも西先生はもちろん投稿しますが、辛口は続き…。例えば  
こらこら、ぶったるんじゃいけねーのは、主人公ではなくあなたです

など（笑）。本当に厳しい！【図 13・14】

しかし、そんな中、ようやく西先生が A を取ります。1986年9月号です。

ようやく A をもぎ取ったね。おめでとう。しかし、次回も応募したまえ。これは命令だ  
竹宮先生に命令されたら逆らえないですね。【図 15】

（竹宮）いやもう、あきれますね（笑）。何だかその後のことを考えていないのが見え見えというか。今振り返ると恐ろしいと思うのですけれども、本当にそのときは西先生の作品が何とかなっほしいと、その一心なのですよね。

同じように、例えば『週刊少女コミック』などでも審査員をしましたが、そういうところでは大変おとなしいコメントしか私は出していません。それが『JUNE』の中では、自分のそれこそホームグラウンドみたいに思っていたので、本音で批評したいというのがありました。同時期に『JUNE』では中島梓さんによる投稿小説を講評する「小説道場」もやっていたけれども、そちらでもポンポン言っていましたから、私も負けずにみたいなどもあったのではないかなとは思いますが。また、『JUNE』に応募してくる人というのは自分と見ている方向が同じというのもあるから、安心して言えるというのもあったと思います。だからこのようなことになっているのだと思うのですが。

（倉持）なるほど。では西先生、これらの辛口コメントを当時どのようにお読みになっていたのかというところをまず伺いたいと思いますが。かなり厳しいことを言われていましたが、当時どのような気持ちでしたか？

（西）そもそもマンガを描いたのが初めてだったので。だから、最初の一作目は、どうやって描くのか何も分かっていなくて、普通のその辺に売っている、学校の購買部とかで買える画用紙に、おそらく筆ペンで描いていたと思うのですよ。ペ

ン先というものを持っていなかったし、インクも持っていませんでした。始めたばかりなのだから、いろいろ言われるのは当たり前だと思っていたのがまず一つ。それから、高校を出るときぐらいに小学館で『プチフラワー』という雑誌で、そこでもコミックスクールというのが始まったのですね。たしか、4人の先生方が交代で審査員をされていて、その中に竹宮先生もいらっやっしたので。萩尾先生、竹宮先生、ささやななえ先生、それから木原敏江先生がいらっやっして、そちらにも、ほぼ同時ぐらいに投稿を始めたのではないかと思います。それ以前はコマを割ったマンガを描いたことがなかったので、毎回、毎回、授業を受けに行く感じでした。

そういう意味で、例えば投稿する前から3年描いていましたとかだったら、「え？こんなに描いているのにこんなに言われるの？」と思ったかもしれないのですけれども、何しろよちよち歩き出したばかりなので、何を言われても「ああ、そうなんだ」と思っていました。どちらの雑誌の投稿でもそんな風に思っていました。『プチフラワー』で何か言われても、『JUNE』で何か言われても、「ああ、こんなときはそうなんだ、ふうん」と。叱られても、「ああ、私は今、全体で言うこんな感じで、今この辺に立っているのかな」という感じで、私は厳しいと思ったことはなくて。むしろ自分の名前が誌面に載るたびに、「私の名前が全国に」と思っていました。

中学校の時、地元の『南日本新聞』という鹿児島新聞があるので、そこにショートショートを投稿して、1000円分の図書券をもらうというのがあったのですよ。お金をもらえるわ、名前を売るわという気持ち良さにその時目覚めたわけですが、それが「全国版に」と思っただけで高揚するものがあったのです。

また、当時、竹宮恵子先生というのは、ちょっと表現できないくらいの大スター、押しも押されもせぬトップスターなのです。そのトップスターが「西さん」と言っているのですよ。叱られれば叱られるほど、「もっと」なのです。「More

西！」なのです。もっと私を叱って、叱って。そうすると私の名前が全国にと、そういう根性でやっていたところがあるので、もう言われれば言われるほどうれしくて、「今回も怒られて西さんと言われている。うれしい！」という感じだったのです。

(倉持) 初めて描いたマンガというのが、『JUNE』への初投稿「子供の頃こういうことがあった」【図6参照】という作品だったのです。初投稿で「お絵かき教室」の冒頭ページに載った。たしかにこれは高揚するでしょうね。そして、描き始めたなら厳しく言われてもそれが当たり前だと。辛口コメントも全然気に留めず、むしろ喜んでいたと。

(竹宮) 密かによかったと思っています、私(笑)。

(西) 普通の人なら、多分、折れているところですよね。

(倉持) そうですね。

(竹宮) それをもしかしてマゾというんじゃない(笑)。

(倉持) では、軌跡の続きを最後まで見ていきましょう。

めでたくAを取った「太陽の下の17歳」という作品は、1986年11月号にて優秀作品として全掲載されています。これが恐らく商業誌に載った西先生の最初の作品かなと思われます。【図16】

この同じ号に、「お絵かき教室特別企画 マンツーマン夏期講習&座談会」という企画が組まれ、その様子が収録されていました。【図17】この企画でお二人は初めてお会いになったのではと思います。

そして、1987年1月号には「お絵かき教室」でずっと怒っていた竹宮先生が満面の笑みで登場

## Records 2019

します。

めずらしく竹宮さんはゴキゲンです！！西桂子さんがナント立派に A の作品を送ってくれたから！！以前のハシにも棒にもかからないハンパなのは大違いの完成品で「考え方をちょっと変えるだけで好結果が表われる！」というよい見本でした。

他の生徒の諸君！西さんに負けず自己改革してがんばりたまえ！

そのときの A の作品も全ページ掲載されています。この作品から、現在のペンネームの漢字に変更されています。【図 18・19】

その後、西先生はずっと A の作品を取りつけ、1987年5月号には

西炯子さんは相変わらず A で、ほとんど免許皆伝第 1 号ということになりそう。これは大変喜ばしい。どうしてマンガの描き方が分かっちゃったのか不思議です。今度インタビューしてみよう。実は感覚的に分かるんだけど

とコメントしています。その A の作品も同号に全ページ掲載されています。【図 20・21】

果たして西先生は『JUNE』にどの位の時期まで投稿を続けていたのかを見ていきましたら、1988年3月号の「お絵かき教室」で、西先生の卒業について書かれていました。教室にほぼ皆勤賞のペースで課題と自由作を投稿し続け、おまけに、『プチ・フラワー』にまで送っていた西炯子さんは、ご存知のように JUNE 作品のレベルも上がり、『プチ・フラ』でのデビューも決まりましたので、卒業ということになります。おめでとうございます！他の人も西さんのエネルギーに負けないように投稿してくださいね。

卒業までしっかり見届けているのですね。【図 22】

(竹宮) そうですね。ちゃんとした一人のマンガ家に育てることができたというのが、私にはとてもうれしいことでした。『JUNE』に投稿してくださる方は大変たくさんいるのですけれども、や

はり途中で描くのをやめてしまう人が非常に多かったということもありますね。このような感じで毎月、毎月やるわけですが、それを西さんのようにずっと続けてやってきてくれるということはほぼないですので、そういう意味で、ものすごく優等生だったのではないかと思います。

私には最初からゴールが見えているわけなので、勝手な、私が定めたゴールですので、そこに行く投稿者というのはほぼ稀ですが、そういう意味ですごく優等生だったと思います。最初がいかにか C であろうとも(笑)。

(倉持) 西先生は、そもそもなぜ『JUNE』に応募しようと思ったのですか？『JUNE』との出会い、読者として当時どのようにお読みになっていたのかというもお聞きしたいです。

(西) 小学校、中学校、高校と一緒に、私にマンガを教えてくれた一歳年下の女の子がいるのですが、その子はずっとマンガの投稿を続けていて、マンガに詳しい子でした。その子がたまたま『JUNE』を購読していたのですよ。田舎の書店には並ばないので、どうやら定期購読し取り寄せて買っていたらしいのです。それを学校に持ってきて、こんな雑誌がある、というふうに見せてくれたのが、『JUNE』との出会いです。それをおうちに持って帰っていいということになって、家で最初から終わりまで、もう初めて見る雑誌なので、世の中にこんな雑誌があるんだと思って、なめるように何度も何度も最初から最後まで読みました。小さい字がたくさん詰まった、今の人なら読めないような小さなポイントの字も、小さいイラストも。本当に何度も何度も。「そろそろ返して」と言われるぐらいまで読んでいました。

それを読みはじめて、1号、2号と読んだときぐらいに、私は高校を卒業することになるのですが、高校を卒業する前に『プチフラワー』のコミックススクールが始まるのと、それから『JUNE』の「お絵かき教室」が始まるらしいというのが告知で載っていたので、高校を出るし、

新しいコミックスクールがどうやら始まるし、その片方はトップスターが1人で見てくれるというし。これは贅沢だなと。『プチフラワー』は4人の先生が交代ですが、『JUNE』では竹宮先生お一人が見てくださるというのがあって、とても魅力的だったのです。これは投稿するしかないと思って、マンガの描き方も知らないのに、両方とも取りあえず第1回目に送りたいかったので、両方とも第1回目に送っているのですよ。どうせだったらデビューしたいなと思って、その後ずっと続けていたということです。

(倉持) 当時、おうちが厳しかったという話を先生のエッセイなどで読んだことがあったと思いますが、『JUNE』を持って帰っても隠れるようにして読んでいた、ということですか？

(西) 隠れるように、そうですね。布団の下にこうやって隠して。

(倉持) 見つからないように、隅々まで読んでいたんですね。そういう少女は当時多かったのかもしれませんね(笑)。

(西) そうなのです。

(倉持) 竹宮先生は西先生の投稿作のどういうところを見て、「この人は辛口でいこう」というふうに思われたのか、覚えていらっしゃいますか。

(竹宮) うーん、分からないですよ。それが本当に自然にそのようになってしまったということで、別の人にはめっちゃめっちゃ甘い評をしているですよ。なので、この差は何なのだろうと、自分をとても不思議に思うところです。

多分、褒める人というのは、バランスがちゃんと取れていて、まだ絵が下手でも構成についてとかがある程度同じ並びにいるのですけれども、西さんは持っているものというかポテンシャルみたいなものがすごく大きいのに、描けてない、何か

足りないというのがちょっとイラッとするので、ついいろいろ厳しく言ってしまう。そのポテンシャルの高さがあるなら、ここまで来てよ、というのが私の中にはあったと思うのですね。

(倉持) それを見極められるのが本当にすごいなというふうに思います。ちなみに、「お絵かき教室」では、細かい課題が提供されていますが、こうした形は『JUNE』だけだったのでしょうか？

(竹宮) 『COM』の「ぐら・こん」とかでもそういうのがありました。私が新人で投稿していた頃にもそういうのがあり、ストーリーが既に決まっていて、舞台設定とかそういうものを投稿者が決めるという課題があり、今、有名なマンガ家の人たちもたくさん投稿しています。そういうようなやり方を実際に見ていたので、『JUNE』でも課題を作れば、まだ物語を作ることがよく分かっていない人にもできるのではないかと思います。それなら話を最後まで作れない人でもできるのではないかなと思って工夫してみたという感じですね。『JUNE』という雑誌は、私が要求すれば形をちゃんと作ってくれるような部隊でした。

(倉持) 課題は『JUNE』らしさみたいなものをすごく意識していますよね。

(竹宮) そうですね。それはやはり『JUNE』という特殊な舞台だから、ある意味関心を持ってもらえるようにしました。

(倉持) このコーナーの常連でほぼ毎回投稿していた西先生は、当時、学業と並行しながらの応募で大変だったと思うのですが、どんなふうにもマンガを制作されていたのですか？

(西) 本格的に描きはじめてのは、大学生になって一人暮らしをしていたときの3年間くらい、集中して描いていたのですけれども、1年間分の手書きのカレンダーを壁に貼って、『JUNE』は

## Records 2019

2カ月に1回、『プチフラワー』は毎月20日くらいを目標に、ここ締め切り、ここ投稿締め切りと丸をして。

(倉持) 自分で決めていたのですね！

(西) 1年間分のスケジュールをその年の始めに全部書いて、赤で丸を付けていくのです。そして両方とも、投稿のためのB4の袋に住所を書いて切手まで貼って、あとは中に入れて投稿するだけ。当時は郵送していましたから、そこまで準備して、丸に向かって毎日、毎日、計画的に描いていました。それをずっと続けていっただけという、だけと言ったらあれなのですけれども、学校でクラブ活動もサークル活動もしていませんでしたし、学校から帰ってきたら4時くらいからずっとマンガを翌朝まで描いて、学校に行って、また4時に帰ってきて、マンガを描いてまた学校に行ってしまう生活をずっと4年間続けていました。

(竹宮) すごいですね。

(倉持) 実は先程、控室で西先生の担当編集さんとお話したのですが、今、西先生は小学館で3誌も連載されているので、つい「 $\times$ 切近くなって、原稿の取り合いになったりしませんか？」と聞いてしまったのですが、「西先生が全てご自身でコントロールされているので、そういうことにはならないです」という風におっしゃられていて、すごいなと思ったところだったのです。しかし、最初からそうだったのだなと！本当に驚きました。

(西) おかしいですね。考えてみたら女子大生が。当時はバブルのまっただ中だったのですよ。ちょっとでも「女の子」という立場を利用したバイトをしようものなら、軽時給3000円稼げる時代だったのですよ。それくらいのバブルの絶頂の時期に、家の日の当たらない4畳半にいて、夕方から朝までマンガを描いている4年間って、

おかしいですね。

今もやはり生活がおかしいのですよ。家から出ずに、ずっと。勝手にスクワットしたりして、家の中で全てが完結するようにしていて、端から見るとそれはおかしいのですよ。元々変だったのかもしれない。

(竹宮) いやいや、自分で設定して締め切りを守れるというのが、私的には。

(西) そうなのですか。

(竹宮) はい。担当さんにだましてもらわないと守れません。

(西) 本当の締め切りよりだいぶ前の。

(竹宮) そうそう。早い時期に、「もうここで落ちますから」と言ってもらわないと、駄目なのですよ。

(西) では、割と頻繁に連絡を取ってもらったりする方がいいのですか。

(竹宮) それは必要なときだけでいいなと思うのですけれども、でも、怪しいから向こうは心配で、ガンガンかけてくるみたいな感じになるわけです。私もそれがうとうしいので、できたらすっきり定められたところに入れたいと思うのですけれども、ちょっとでも時間があれば、作品のために使いたくなるではないですか。

(西) そうですね。

(竹宮) だから、本当の締め切りを教えてしまうと、そこまでいってしまう。そうすると悪循環にしかならない。次の締め切りも遅れてくるし。だからどこかで遮断するためには、だましてもらえないので、そうしてもらったという(笑)。

(西) 一番お忙しいときは、月産どれくらいやっていたのですか。

(竹宮) 一番多くて100を超えるか超えないか。140くらいですかね。

(西) では、月に締め切りが4回か、4回以上のときもある。

(竹宮) 月2回締め切りが重なるみたいな感じですね。月刊が重なるから。『JUNE』というのはそこから逸脱した雑誌なので、またちょっと違う感じで出てくるみたいな感じでしたね。

(倉持) 『JUNE』は先生が毎号表紙絵を描かれていましたからね。

(竹宮) そうですね。それは私の主張でもあったので。男の子を描かせてくれないですから、他の雑誌は。ストレス解消に描いていました。

(倉持) 竹宮先生は京都精華大学でマンガを教えているわけですが、「お絵かき教室」は、マンガを教えるという点において初めての試みだったのでは、と思いますが、振り返ってみてどんな苦労ややりがいがありましたか？

(竹宮) 絵において、タッチするというのは難しいのですよね。確かに正しいことではあるけれども、パーツについて細かいことを教えたりするのは、気持ち良く描いている人を面白くない方向に行かせてしまうということがあるので、モチベーションを下げないようにちゃんとしたことを入れるのは難しいなというのはすごく思いましたね。それは今でも同じですけどね、学生に対して。加減が難しい。

(倉持) 西先生は「お絵かき教室」で初めて商業誌に掲載され、きちんと原稿料も出たとおっしゃっていたと思いますのでそれがデビューとい

う形かなと思いますが、改めて振り返り、そのときの心境とか教えていただけますか？もしかしたら、デビュー時点でファンもすでにいらっしゃったかもしれないと思いましたが、読者の反響などもうかがえれば。

(西) 読者の反響というのは私には直接は届かなかったのですが、原稿料を頂けたのはやはり大きかったです。当時は1万3000円で、源泉徴収で300円引かれて1万2700円ですよ。うちはお小遣いがなかったので、これでマンガの材料とかマンガがいっぱい買える、本をいっぱい買えると思うと、うれしくてたまらなかったというのがあります。

(竹宮) 私も最初原稿料は、スクリーントーンになりました。スクリーントーンみたいなものを初めて買うっていう感じですよ。

(倉持) お二人とも初めての原稿料はマンガを描くために使ったのですよね。いい話です。

先ほど、『JUNE』誌面で、竹宮先生と西先生含む優秀投稿者3人の座談会が企画されていたと紹介しましたが、この時の初対面の思い出もうかがえれば。

(西) 当時、先生がお住まいだったところは白亜の御殿で、先生が描かれるマンガのようなおうちだったのですよ。夢に見るような少女マンガ家の。

少女マンガ家ってこんなおうちに住んでらっしゃるのだらうなと想像していたのが実際にそのままありまして、入ったら中二階みたいな所にランドピアノが置いてあるのですよ。先生は、「ほとんど弾かないのよ」とおっしゃったのですが、マンガ家さんの家にピアノがある、稼ぐってすごいねと思いました。また、同時に最初に部屋に入っていくときに、「こんにちは」と言おうと思っていたら、「ちょっと待って。名前当てるわ」

## Records 2019

と言われたのですよ。それで、「あなたが西さんね」と言われて。「みんなやっぱり自分の描くマンガに顔が似ているわよ」とおっしゃられたのは、すごくよく覚えています。

(倉持) この座談会は竹宮先生のご自宅で開催されたのですね。

(竹宮) そうですね。

(倉持) それはすごい。

(竹宮) 西先生がおっしゃっているピアノは、きっと増山のピアノです。グランドピアノですよ。だから、多分、そうだと思います。

(倉持) 増山法恵さん。当時、先生のプレーンでマネージャーもされていた方で、「変奏曲」の原作者でもあります。竹宮先生はこのときのことを覚えていらっしゃいますか。

(竹宮) 3人で来てもらってお話したのは覚えています。そのときの編集長が京都精華大学と一緒に教えている佐川俊彦さんなのですが、その人が多分、私の家に行けるということを売りにしたのではないかなという気がしております。

(倉持) 優秀者は竹宮恵子邸にご招待。

(竹宮) ご招待。

(倉持) それは頑張りますよね！

西先生は『JUNE』でいくつか作品を発表し、『JUNE』を卒業と形で、活動の場を『プチフラワー』に移されています。しかし、『JUNE』の方にもたびたび作品は寄稿されていたと思いますが、他の商業誌と比べたときの違いや自身の作品に変化があったかなどありますか？

(西) 当時、『プチフラワー』はまだ歴史の浅い

雑誌で、それこそ私が高校を卒業するときにコミックスクールを始めたくらいなので、作家さんも野心的な作家さん。当時 SF がとても流行っていたこともあり、他の少女マンガ誌には載っていなかったハードな SF であるとか、ファンタジーの世界であるとか、他の少女マンガとは少し毛色が違うとか、はみ出るとか、だけどそういうのを読んでみたいと思う読者にとっては、「おお、こういう雑誌がついに」と思うような雑誌でもあったのです。いわゆる普通の、告白した、好きになった、キャーみたいなマンガは載ってなくて、少女マンガにしてはハードな。

(竹宮) そうですね。ハードという言葉方もあるかなと思いますね。平和ではない話ばかり。

(西) 初めてそういう雑誌に出会って、高校を卒業するし、何かここなら私を受け入れてくれるのではと思ったのかもしれないです。「先輩、キャー」みたいなのが描けなかった。ここの雑誌だったら私にも少し場所がないかなと思って。そういう位置付けの、非常に珍しい少女雑誌だったかもしれないですね。

(倉持) なるほど。『プチフラワー』自体がそもそも他の少女マンガ誌とは異質の、革新的な雑誌だったわけですね。つまり、そんなに違いを感じて苦労したみたいなことはなかったということですね。

(西) そうそう。私の世界が、もしかしたらこっちに開けるかもしれないと思った雑誌だったと思います。

(倉持) 「お絵かき教室」から有名になったマンガ家というのは、西先生も含め、他にもたくさんいらっしゃると思うのですが、その後の活躍というのを竹宮先生はどのようにご覧になっていましたか。

(竹宮) そうですね、『JUNE』でそれこそ A を取って、ちゃんとそれが本に載る形になるということは、別に他のテーマでも、つまり少女マンガにふさわしいテーマであっても描けるようになるということと同義だと思っているので、そのまま『JUNE』のテーマばかりでやっていくというふうには思っていませんでした。だから、皆さん雑誌に合わせて自分の居場所を獲得していく過程をずっと見ていたというか、ああ、こんなものを描きはじめてのねというようなこととか、そういうのは見ていました。

(倉持) 当時、編集長だった佐川さんも、『JUNE』を踏み台にして飛び立ってくれたらいい位の気持ちでやっていたと別のイベントでおっしゃっていましたが、実際に他の雑誌でデビューして、「卒業おめでとう」と祝う雑誌というのは、今、考えたらすごいなと思いますね(笑)。懐が大きいですよ。

(竹宮) たしかに、『JUNE』はそんなにたくさんページ数を用意できないですからね。だから、本当に短いものしか描けないわけなのですよね、新人では。そういうこともあるから、どんどん他のところに出て行って、たくさんページを獲得して、毎月、幅跳びをしていってもらった方がいいかなと思っていました。

(倉持) ありがとうございます。『JUNE』時代についてはまだまだ聞き足りないところもありますが、お二人の代表作や制作背景などについてもお話をうかがえればと思います。お二人の共通点は大変多作であることかなと思います。本当に様々なテーマで作品を描かれています。作品を描くにあたり、題材をどんなふうに分けられているのかということと、また、掲載雑誌について、ジャンル問わず横断的に活躍されているなというのがありますが、雑誌の色はどれくらい意識して描いているのかという、この 2 点をお二人に聞きたいなと思います。

(竹宮) 私はいろいろな毛色の違う雑誌から依頼がある、依頼者が全く雑誌と関係ないところであるとか、そういうことにすぐ興味を覚える方なのですね。作家にもよるとは思いますが、ずっと自分の色を一つに定めて、それをやり続ける作家、つまり必要とするのだったら描きますけれども色は同じですよというやり方もあると思いますが、私はできるだけいろいろな色のもを描きたいし、イラストも毎回、毎回、違う色使いで描きたいと思います。一番に自分が飽きてしまうので、できるだけ違うものに挑戦したいのです。そういうこともあって、全く違う雑誌からご依頼が来ると、それに合わせて自分がそこで足場を築けたらどんな色合いのものかなということを考えてながら作っていくので、その雑誌の中では自分は浮いてしまうかもしれないけれども新しい色が出せると思ったらそのタイプでいくし、そうではなくてそこになじむ話を自分が描けると思ったら、なじめることをポイントに描くということもあります。

(倉持) 最初にこういう作品が描きたいと思ったとして、この作品ならこの雑誌だろうというふうに分けることはありますか？それとも依頼ありきで、この雑誌だったらこれだろうという感じなのか？

(竹宮) 依頼がないと基本的に描けないので、自分に見合う雑誌を自分から決めるということは、私の場合はないです。人によってはあるかもしれませんが、私自身はなくて、依頼が来て初めてそこのセッションを考えます。

(倉持) 西先生はいかがですか。

(西) 私はマンガを描く上において、キャリアが二部に分かれている気がするのです。初発の動機というのは、自分の中にある整理されないものを表現していったら、というところから始まる。若

## Records 2019

手のマンガ家は、多分、小説家の方も、クリエイターの方も、自分の内部衝動とか処理し切れないものを「こうなんだけどさ」と言いながら拙い絵で見せていく、表現していくということからスタートするのもかもしれません。

私はそれを随分長くやっていて、それで評価されたところがあるのですけれども、自分の中の問題というのは大人になるうちに整理されてきてしまって、世の中はこうだ、人はこうだ、私はしょせんこうだ。しょせんと言ったらあれだけれども、私はこうだ、人はこうだというのがだんだん自分の中で分かるようになってきてからは、自分の内発的などころに題材がなくなってしまったなというふうなことを、30歳ちょっと過ぎるぐらいに感じはじめて、それからちょっと辛かったです。何を描いたらいいのかが分からなくて。

当時、小学館では、私はデビュー以来ずっと担当編集という人が付いていなかったのです。担当が付いたのは今から14年ちょっと前です。担当編集がデビューからずっといない状態で描いていたので、「これを描いたら面白そうよ」とか、そういう提案は全くなくて、「次は何描くの?」と編集の人に言われて、何を描いたらいいんだろうという状態が結構長く続きまして。その間、色々な壁にどかんどかんと、ぶち当たっていつている時期がありました。

内発的などころから描くマンガというのはやはりとても魅力的で、若い人のエネルギーであるとか、多くの人が言語化できないけれども「あ、これ分かる!」というところを描ける時期というマンガはとても魅力的なのです。それを捨てるにしのびない。けれども、もうここには私の動機がないという時期が、多分、10年くらいあったのです。

そこからもう駄目だと思って、内発的などころではなくて、例えば、こういうリンゴが欲しいから、こういう糖度20度ぐらいのリンゴを作って、この時期に出して、お客さんはこの地方のこういう人というふうな感じで、注文に応じて作る

というか。自分の持っているもの、今まで蓄積したものの中からこういうものがありますけれども、これはどうでしょうか、これは商品になりそうでしょうかというようなことで提案し、ではそれを商品にしてみましょうか、大体年齢層はこれで、性別はこんな感じで、ブスはこれくらい出ていますよ、今こういう話を描くと面白いかもしれませんねという形で、発注者こちらの持っている材料とを合わせて、オーダーメイドで作るようになったのが第2期です。これが40歳になる頃だったと思います。

40くらいから、私は明らかにマンガを作る動機が変わっておりまして、発注があって、例えば100を求められたら120ぐらいで返すことを目標として描くようになったのが、ここ10年ちょっとです。多分、私の場合は、ここ10年とそれまでの20年近くでは、雰囲気が変わっています。

(倉持)なるほど。面白いです。西先生の作品の変遷には、そうした動機の変化があったわけですね。竹宮先生は、そういうシフトした時期はありますか。

(竹宮) 私自身は最初から注文されて描くものというマンガ家の形態に、基本的に、はまっていこうとしたタイプなのです。だから、注文があることに対して応えようという方向性しか最初はなくて、周りの人が内発的なものをたくさん描くようになったので慌ててしまったというか。そうでなきゃいけないんだ、作家というのはそういうところがなければという気持ちに、途中でなったのです。

(西) え?

(竹宮) デビューして3、4年ぐらいしてから、そういうふうになったのです。内発的なものを持って出てきたわけではないのです。基本的に生活に不満というか、何かイライラしているとか、何かに怒っているとか、そういうものを持って

るわけではないタイプだったので。別に普通に、社会的にもというか、家族の中でも別に何の問題なく過ごしてきたので、不満もなかったから、叫びたいことというのもなかった。逆に言うと、自分の中にそれはないのかとわざわざ探す、そういう感じでした。だから、今聞いていて、普通はそうよね、私、変だよなって（笑）。

（西）動機はさまざまですよ。さまざまですよ、先生。

（竹宮）私は逆にそれを自分の中で探したので。だから、本を読むことが足りなかったのかもしれない。他の人はもっとたくさん本を読んでいたりして、いろいろ内省的なことを考えているということがあったのだろうけれども、私は幸せに過ごしてきたのでなかったみたいなのがあって、後から勉強しましたみたいな。だから、「風と木の詩」とか「地球へ・・・」を描いている頃には、ようやくそれをどうやって出せばいいのかが分かってきたという感じですね。プロになってから1、2年でそういうことに悩みはじめて、そのあと3年間くらい、出すもの、出すもの、気に入らないわという時代を過ごしたので。だから、その頃は「自分の内面って何？」みたいな状態だったんだと思います。

（倉持）お互いに同じ悩みを通過しているけれども、その時期が真逆。

（竹宮）作家になるために、どこかしらでそれは必要なのだろうと思います。でも、それを持っていることが普通なのに、自分が持っていないことに気付いて慌てる人は、あまりいないかもしれないなと思います。

（倉持）お二人の共通点でいうと、作品から「これが萌えである」ということがはっきり示され、教えてくれるなということです。作品からそれをすぐ感じるのですよね。竹宮先生だったら、も

ろん「美少年」というところを開拓されましたが、例えば、「ウィーン少年合唱団」がこんなに萌えるものなのかというのを教えてくれたり、対する西先生は、「おじさん」ではなくて「おじさま」の魅力に気付かせてくれた作家だったと思っています。萌えポイントを描くというのは実は非常に難しいのではと思います。自己満足に描いて終わってしまう人がとても多い気がしますが、お二人の作品はこれまでそう思っていなかった読者にも共感させる、目覚めてさせる、というようなことがあると思います。そういうポイントを描くコツみたいなものがあれば、教えてください。

（西）私の場合は、男性の好みということで言うと、他の人と少し違っているというのが、自分でも昔から気になってはいたのですよ。私が「あのいいよね」と言うと、みんな「ええ？」「何で？」と。「いや、何でとまで言われる？」のというようなことがあって。どうやら私が好きな、特に男性というのは、一般の女の子にはちょっと受けが悪いぞということが、マンガを描きはじめて頃から自分の中ですごく問題になっていたのですよ。私が好きなタイプの男の子を描こうと思うと、それが一般の女の子にあまり受けないというところが、「甥の一生」の方でずっとあったのですよ。

ずっとあったのですけれども、あるときに年上の方と恋愛をして、失恋をして、失恋したんだからお金で取り戻そうかなと思って。元を取らないと失恋しただけ損ではないですか。そう思って。本当にその方のことが好きだったのですよ。だから、多分、コツがあるのではなくて、本当に愛があったか、なかったかという、そこにかかっているのではないですかね。私の場合はコツというのは多分なくて、愛だけです。

（倉持）竹宮先生はいかがですか。

（竹宮）私は説明したいタイプなのです。とにかく私がこだわっているものを、できるだけ説明したい。分かりやすく、誰でも分かる方法で、どう

## Records 2019

すればそれができるのかと考えていると、エピソードができてしまうみたいな。

(西) 竹宮先生の男性の趣味は、割とイケメンですか。

(竹宮) いや、そうでもない。

(西) 女の子受けのいい男性が好きとか。

(竹宮) それはあまりないですね。どちらかというと、変わったところに目を付けるというのはあります。でも、いかにそれが魅力的かということ。例えば、「風と木の詩」のパスカルみたいな登場人物をいかに魅力的に、魅力として分かってもらうかということに工夫を凝らすのです。そうすると全然違うエピソードが生まれてくるので、分かってもらう形をつくるというか。

(倉持) では、竹宮先生の場合はかなり戦略的に「これがいいんだぞ」と。

(竹宮) そうですね。

(西) 自分の好みに絶対的な自信がある。

(竹宮) うーん、好みはみんなそれぞれだということは基本として分かっている、だから私が思う魅力も魅力でしょというところがあって、それをきちんと説明したい意欲に駆られるというか、どちらかというとそんな感じですね。

(倉持) 例えば、先生が「こんな男、嫌だよ」というキャラクターがいたとしても、その人の魅力を描くことも？

(竹宮) 「風と木の詩」でいえば、皆さんの嫌いなプロウとか、ジルベールをいじめる大人のキャラとか、そういうものを描くときに、嫌さ加減というのを魅力として描いてしまうということも

あります。気分の悪さというものをいかに描くか。それが明確であればあるほど作品の魅力にはなると思うので。そういう感じですね。

(倉持) 竹宮先生の描く悪役は、嫌悪感だけじゃない、魅力を感じてしまう部分がありますが、そういうことが意識されていたのですね。単純な質問になりますが、お互いの作品で、一番好きな作品は何でしょうか？

(竹宮) 私は西さんの初期のマンガですね。不自由な感じがすごく好きなので。

(倉持) 『JUNE』に投稿していたような初期の作品ですか？

(竹宮) はい。天使のキャラが好きですね。

(倉持) 他にも「ひらひらひゅ〜ん」なども、お読みになられていたと。

(竹宮) はい。「ひらひらひゅ〜ん」って何？と思い、連載しているときにちょっとのぞいて、ああ弓道だと思って。私は弓道がすごく好きで、大学のときにクラブに入ろうと思って説明会に行ったことがあるのですよ。試しに行って、弓を引いてみました。それで「無理、帰ったらマンガが描けない」と思ってやめたのです。

(西) 手が震えてしまうんですね。

(竹宮) そうですね。そうした経験があっただけですね。弓道に関しては、ずっと関心があるんですね。だから読んでいました。

(西) ありがとうございます。すごくうれしいです。

(倉持) 西先生は弓道をされていたのですか。

(西) はい。中学校の教員をやっていたときに、部活動の顧問というのが回ってくるのですけれども、それで弓道部の副顧問というのをやらされて。先生が顧問になるためには、始めたばかりの人でも、一応、初段をあげるのですよ。指導する先生のための講習会みたいなものが常にありまして、そこで試験を受けさえすれば、初段というのが与えられるのです。それで初段を取りまして、生徒たちとやってみて、何と面白い競技だと思い、数年はまっていたことがあるのです。

(倉持) ちなみに中学校の教員は何年ぐらい続けられてしまったのですか。

(西) 不合格になって、本採用にならずに講師というものをしていたのですが、その時期を含めれば丸々3年くらいはやっていたと思います。

(倉持) では、学校の先生をしつつ、弓道部の顧問もやりつつ、マンガを描いていた。

(西) はい、描きつつです。赤い丸を付けつつです。

(倉持) よく両立していたというか、マンガに対する情熱がすごいです！

(西) 若かったからですね。

(倉持) 竹宮先生のように、弓道をやっていたら、マンガを描けなくなるとは思わなかったのですか。

(西) あれは慣れなので、筋肉ができてくれば大丈夫です。

(倉持) 西先生が好きな竹宮作品は何でしょうか。

(西) 「マンガを読むのは駄目」という家庭だっ

たので、自分で単行本というものをほとんど買ったことがなくて。だけど、友達が買っていた『週刊少女コミック』に「風と木の詩」という何か怪しげな作品が載っていて、怪しい蜜の味があるに違いないということで、友達のおうちに行ってはそのページだけをこっそり見て、ああ、蜜の味と思って(笑)。でも、買うお金もないし、借りて帰ったら母親に怒られるしと思い、いつかまとめて読みたいと思っていました。それで大学に入り、自分でお金を稼げるようになったときに単行本を大人買いしました。一気に買って、それで初めて竹宮恵子先生という方の作品をドンと浴びたのです。

それで、途中から読むペースをあえて落としたのですよ。なぜなら、早く読んでしまうと終わってしまうと思って。5巻ぐらいまで読んでからもう1回1巻から読んで、ノーカウントにして、1巻から5巻までもう1回読んで、あとはちよつとずつちよつとずつ飽きをなめるように(笑)。なめていて、読み終わってはまた少し戻りという読み方をして、最後にたどり着いたときに、当時、私は山梨県の日の当たらない4畳半に暮らしていたのですけれども、私は今、パリにいて(笑)。パリで焼き栗を食べている気持ちになったんですよ、本当に。おなか空いた、焼き栗と思うほどに、私はその世界に生きていたと思います。

あれは本当に私の青春において、内省的というところもあったし、人と人の愛って何よっていうことに18、19、20歳で目覚めはじめて、大学生のときは暇なので、人が出会うこと、愛って何、気持ちって何、感情って何ということまで描くの！と思った作品です。マンガを大量に読みはじめて、最初に心にドンと突き刺さった物語で、忘れられないのです。

だから、その方が、私を『JUNE』で叱るんですよ。これはもう「モア！」ですよ。

(倉持) それはたしかに快感になりますよね(笑)。イベント前に西先生には、「竹宮恵子 カレイドスコープ」展もご覧頂きましたが、風木の

## Records 2019

コーナーは特にじっくりご覧になっていましたね。

(西) そうなのです。

(倉持) 原画をご覧になられてどうでしたか。

(西) あのととき味わった飴の味を思い出す感じで、ああ、こんな気持ちで読んでいたと。特にカラーのものを見て思い出しました。今はデジタルでいくらでもきれいな絵が目の前を左から右に通過していきます。それもきれいですが、当時、手書きで塗料で描かれたカラーの絵は、そのとき時間があったということもあるのですけれども、ただうっとり眺めてはその世界の中にふわっと入り、閉じて時間がたったらまたもう1回見て「きれい」と。そういう時間があった。その時間が何と甘美だったことよ、と。展示を見て思い出しました。

(倉持) 展示会場にはそういう人が何人もいますよ。きっと当時の気持ちになっているのだろうなと思います。

(西) 懐かしいというのものもあるかもしれませんが。あのととき印刷で見たあれが、今ここに、なんです。セリフまで全部言えるから、頭の中で行ったり来たりして。

(倉持) ぼわんと、世界に浸っているような甘美な時間が展示には流れています。

お二人に聞いてみたかったのですが、ずばりライバルと意識されている先生はいらっしゃいますか？昔でも今でもかまわないのです。

(西) その時々、3、4年に1回、歯がみするまでと言うと笑われるのですけれども。今はそれがコナリミサトという方なのです。

(倉持) 「凧のお暇」の作者ですね。

(西) そうなのです。私は文化庁のマンガのメディア芸術祭のマンガ部門の審査員を去年からやっていますが、凧推しだったのですよ。すごい凧推しで、こういう人が現れたからには、私も少女マンガは描けないと思ったぐらいショックを受けて。

その数年前には藤村真理の「きょうは会社休みます。」も。数年に1回、「あんなのやりたい！」という作品が現れるのですけれども、自分のマンガしか描けないしと思って、ぼそぼそ描くだけなので。だから、ライバルというか、時々、「うー、私には描けない！」とイライラする人、巨大な才能がボンと現れますね。

(倉持) 竹宮先生はいかがですか。

(竹宮) 私なんて「自分の絵が嫌い」と、ずっと言い続けて。

(西) 何で。どうして。

(竹宮) いやいや、自分の絵って、どうしても自分が出てきてしまうので、それが嫌になってしまうんですね。それが嫌いだったこともあって、自分の絵が好きな人がうらやましいなど、ずっと思っていて。いろいろな人に聞いて回って、萩尾望都さんにも聞きました。

(西) 何ておっしゃったのですか。

(竹宮) 「好きですよ」と。

(西) そうですか。

(竹宮) 「それが普通でしょ」と言われたけれども、私はそうじゃないしという話だったのです。そんな感じで、周り中ライバルだらけですよ。自分が全然持っていない、少女マンガのらしい雰囲気みたいなものを持っている、大島弓子さんと

か。めちゃめちゃいいよねと思って。自分には全然描けないんだけどみたいな。そういう意味では本当にたくさん周りにいて、時代ごとにももちろんいるし、誰ということなく、この人のここに嫉妬するみたいなの、そういうのはありますね。

(倉持) 自分には持っていないものを羨むわけですね。

(竹宮) そうそう。そういうものを見ると、私には描けないと思うと、やはりうらやましい。そういうのはありますよね。手塚治虫先生とかでも他のマンガ家に嫉妬したという話もありますし。

(倉持) そういう嫉妬心は重要なかもしれないですね、マンガを描くのに。

(竹宮) 手塚先生のおかげでそれでもいいんだと思ってしまったところもあります。嫉妬していいんだという。

(倉持) 最近のお仕事についても伺っていきななと思いますが、まず西先生は、現在、「初恋の世界」「たーたん」「恋と国会」などを連載されていますが、この作品たちはどのような経緯で描こうと思ったのでしょうか。

(西) 「初恋の世界」については、最初に「甥の一生」を始めたときに担当されていた小学館の男性の方の言葉がきっかけです。ちょっと冗談で、「姉の結婚」の連載開始したとき、地方に戻ってきた女三部作をやらうみたいなのを言っていて、三部作をもって完結したら、前の作品で書き残したものを次の作品でまた描けるのではないかと、東京から帰った女シリーズを3本描こうよという軽口から、始まったのが「初恋の世界」です。

「たーたん」については、できれば私はいろいろなマンガを描けるようになりたかったのですよ。別に卑下しているわけでも何でもなくて、私は才能型ではなくて特性でやっていくタイプだな

と思ったのです。なので、自分の特性を生かすためには、いろいろなところに描いて、いろいろな読者の方に読んでもらいたい、ジェネラルに描けるマンガ家になりたいなということを今から10年ちょっと前に思って。「小学館頂上計画」と私は呼んでいるのですが、『ビッグコミックオリジナル』で描いて、『ちゃお』でも描いて、という夢が実はあり、この二つをやったら小学館は制覇だなと(笑)。キャリアの割にそれをやりたいというのがあって、そのときに担当していた編集者が、同期に『ビッグコミックオリジナル』の編集者がいたので、「西というのが青年誌に行きたいと言ってるんだけどどう？」と橋渡しをしてくださって生まれたのが「たーたん」です。

「恋と国会」につきましては、最初は少女マンガとして女性が総理大臣になる話は面白いのではないかなと3、4年ぐらい前に考えついて、その話をしたら『ビッグコミックスピリッツ』が「青年誌でやりませんか」とおっしゃっていただいて。「女性が総理大臣になるのではなく、男性誌だから男性になる話にしない？」というような話をしながら、「うちでやりましょうか」というようなことで始めました。

(倉持) 女性マンガ誌と青年誌を同時期に横断しているという、これもなかなかないことだと思います。例えば、三部作と先ほどおっしゃっていましたが、「初恋の世界」「甥の一生」「姉の結婚」は、アラフォーの女性の心境がすごくリアルで。かと思えば、他の作品では、思春期の女の子の姿だったり、男性目線の心境だったりリアルで、色々な立場の人間を生き生きと描いています。そうした人物たちに共感している人は多いと思いますが、読者の反響など、印象的なことはありますか？

(西) 生々しい反響は伝わってこないのですが、子ども、「たーたん」みたいなものを描いておると、お子さんを持っていらっしゃる、特にお嬢さんを持っていらっしゃる男性の方から「あれ読むと駄目なんだよ」という話をされて、そのとき

## Records 2019

に、ああ、心に届いたなという感じはあって、そういうときはうれしいですね。

(倉持) 「たーたん」は、私は逆に女の子の方の気持ちに寄せて読んでいる部分が大きかったです、この作品のメイン読者はお父さんですもんね。そうした方にもきちんと届いている。

竹宮先生は、今回の展覧会に当たっても描き下ろしをたくさん描いてくださいました。また、大学の様々な業務、国際マンガ研究センターのセンター長や、マンガ学会の会長など、本当に多数のことをこなしてらっしゃいますが、どんなふう制作の時間を設けられているのかといつも不思議です。

(竹宮) 合間を縫ってとしか言いようがないんですけど。

(倉持) 合間があるのか?と思うほどお忙しいですよね。

(竹宮) 合間は作るしかないので、作って描いています。ワンコの運動をさせながら、それが終わったらまた描きに戻りみたいな感じでやっているのですけど。

何かの長をやらなければいけない年齢になってしまったということもあるし、立場上、様々な会議にどうしても出なければいけないということもありますが、描くということに関しては嫌いではないので、何か提示されると「じゃあ描いてみる」ということはやっています。ほとんど半リタイア状態なので、マンガ誌に連載するとか、今すぐにそこに戻ることはとてもできそうにもないけれど、何かを描くということに向かうのはすごく好きなのですよね。だから、必要が生じると、例えば新しい本を出したりするときに「こういうものを描かない?」と言われると、「では描いてみましょうか」とか。また、今回の展示がきつと最後の大きな展になるのではと思ったので、「面白い試みで何か描いてみようか」みたいな形で描いた

りしているということはありません。でも、それは特に予定された日があるわけではないので、何となく無理やり食事の間とかに。

(倉持) 最新の著作では、『竹宮恵子 スタイル破りのマンガ術』という本を出されていますが、京都精華大学での講義の様子もかなり細かく再現されていて、とてもおもしろかったです。今年度で京都精華大学を定年退職される予定で、教授生活にも区切りをつけられるかと思いますが、マンガを教えるということについて、改めてどうだったかとか、お考えをお聞かせいただければと思います。

(竹宮) 教えるということが好きだなと思います。どのような機会でも、あれば教えてみたいですね。全く初めてマンガを描く人が対象でもいいし、例えば留学生で日本語がまだあまりよく分からない人でも、マンガを教えるということにおいては同じだと思っていて、必ず何か一つでも分かったということがあってほしいという姿勢で教えているのです。逆に言うと、どのような人が前に来ても教えることができるのでは、と今は思っています。その人の程度にふさわしいものを教えていけないといけないので、相手次第だとは思うのですけれども。

本に講義の様子を載せたのは、「授業でどんなことを教えているのかについて取材をさせてください」と言われたので、それなら見に来てそれをそのまま掲載しては、と提案をしました。去年の後期の最後ぐらいの授業でしたが、一人一人の作品を全部みんなに見てもらい、その上で物語をすべて板書し、流れを追い、この部分の描写が足りないからもう少し入れないと、みたいな小さな評を入れていくといった内容です。本人が、何がなくてはならないかが分かってくればそれを直すでしょうし、その辺はちゃんと伝えるということが大事なので、分かったかなということをとにかく確認したいというふうに思っています。学生も本に載るならうれしいと言ってくれたのでそのま

ま掲載しています。

(倉持) 竹宮先生の授業を受けたことがない方にとっては、こんなふうに進めているのかと興味深く読めますし、描く人にはもちろんですが、この本はマンガを教える立場の人にとっても参考になる一冊ですね。

西先生は、今たくさん連載を持たれていますが、アシスタントの数とか、月の生産数はどれくらいで、制作過程のどの部分に一番時間がかかるとか、教えていただけますか？

(西) アシスタントについては、アシストさん用の机が二つしかないの、最大 2 人です。この机にローテーションで 4、5 名の方が次々入れ替わるというような形で回しています。月の生産量としては、多いときで 100 枚近くになるかもしれませんが、でも、大体は 60～70 枚くらいで推移しているのではないのでしょうか。

(倉持) 一番時間がかかる工程はどの部分ですか。ネームが一番かかるとか、ペン入れとか。

(西) 特に一番かかる、というのはありません。一回ネームにかかってしまったらいつもの流れ、ルーティン作業で、ネームが 26～30 枚であれば、本当は 1 日でできるのですよ。本当は 1 日で、7、8 時間あればできるのですけれども、プロットに 1、2 時間、ネームに、これはセリフとコマを割る仕事で大体 4、5 時間。それで翌日に、今度はそこに絵をぎっと入れていく仕事で大体 2、3 時間というふうに決めてあります。

ですから、本当は、ぎゅっと詰めれば 7、8 時間くらいで終わってしまうものなのですけれども、マンガを描き終わって、次のマンガを描くまでの時間をちょっとでも休養に充てたいから、ネームを本当は数時間でできることをばらして 3 日でやるというふうに決めているので、急がずに、どんなに次の工程に入りたくても我慢して、今日はプロットだけ描いてというふうにして、1

日に作画の時間は朝 10 時から夜 6 時か 7 時までと決まっているので、その間に大体目標として、例えば、背景でいうと 1 日 8 枚というふうに決めていて、大体この日ぐらいいまでに背景が全部終わる、仕上げまで含めるとプラス 2 日でこれくらいとして、それ以上のオーバーワークはしないようにしています。なので、どこが一番というところはないです。一回ベルトコンベアに乗ったらずっと、いつもと同じ作業工程を続けるだけという。何でわざわざするのですか。

(竹宮) そんなにできないからですよ。決まっているのではないですか。

(西) 基本的に、おにぎりを詰めていくような感じですよ。

(倉持) ここで終わりにしようと思ってもできなくて、どんどんずれていく、というのが普通ですよ。

(竹宮)すごい計画的ですよ。

(西) 工場みたいな感じです(笑)。

(倉持) アシスタントの話を書きましたが、西先生自体がアシスタントをしていた話も。先程、館内を巡り、西先生が「私、この人のアシスタントをしたんですよ」とお話をしていました。猫十字社先生のアシスタントをされていたとうかがって。ちょうど単行本があったので、西先生が「私、ここを描いた」というところを教えてくださいました。

(西) 当時、山梨県で大学生活を送っていたところ、当初の編集長から隣の長野県で猫十字社さんという、うちで連載してらっしゃる方がいるのだけれども、急遽来る人がいないかということで、確か 2 泊くらいで出掛けたいと思います。それで覚えているのが、この波を描いたことです。波

## Records 2019

を描いたことと、お洋服の VUITTON のマークをひたすら手書きでお願いと言われて、VUITTON をひたすら描いたことを覚えています。それでお金をもらって帰りました。

(倉持) こういうトーンがあるのかなと思うぐらいびっしり描いてありますよ。

(西) 懐かしかったです。

(倉持) 先程、文化庁メディア芸術祭の審査員もなさっていたという話もされたと思いますが、今日は『JUNE』で審査される側の話をたくさん聞きました。マンガを審査する側としてどんな苦労、楽しさがあったのか、もし何かあれば教えてください。

(西) 私は去年初めてその仕事を拝命しまして、今年もやるのですけれども、やはりお国の事業というところがあって。「これは文化庁の賞を与えるのにふさわしくない」というワードが時々出てくるのですよ。それに限って私が「キャー、おもしろえ」と思う作品で。だから、「磯部磯兵衛」みたいな作品は、私も迷わず大賞と思うのですけれども、「これはちょっと文化庁から賞をやるのはな。他の賞ならもらっていいけど」という話になるのです。例えば、私は「凧のお暇」と同じくらい「生理ちゃん」を激推ししていたのですよ。大賞もらっていいくらいだと思っていて、全世界の男はこれ読めと思ったのですよ。だけど「これは絵がちょっと…」とか言う人がいるのです。「ちょっと国の賞を与えるにはな」というので、結果、減点できないものが大賞になる。「何が何でも私はこれが好きだから」というのではなくて、「ああ、これは完璧ですよ。減点できないですよ」というものが賞をもらってしまうことになるのが、つまんねえな、とは思うのですよ。

例えば、昨日も担当編集と話していたのですが、マンガってこれから何が大事かと思ったときに、「俺は何と言われようがこれが好きなの、他の人

が嫌いでもこれが好き！」というものが一番強いし、それをみんなが待っているのだと思うという話になったのです。何か自分の心にずんと入ってきて、差し込んでくれるようなもの、心に穴を開けてくれたり乱したりしてくれるようなものを、描く側もドンと持ってこななければいけないし、それは企画とかそういうことではなくて、「俺の好き」「私の好き」というものを、グイッと押し付けていくことではないか。読者の方もそれを求めている。「分からないけど心が動く」というようなものが、これからマンガには必要なのではないかな。そう思ったときに、もう少しお役所側が与える賞もそういうふうにならないかなと思いました。お役所でやる人というのはしよせん高学歴のエリートなのですよ。マンガみたいなものから「心がこっちへ持ってかれた。俺どうしよう、どうなっちゃうの？」という経験がないまま役人になったのでしょうか。「ああ、マンガね。はいはい。お母さまが読むなと言うので」みたいな、そんな感じで来られた方、作ったものによって心をどうしようもないほど持っていかれてしまったとかという体験がないまま、予算が付きましたのでこれを肅々と執行させていただきますみたいな感じでやっている方が相手だと、つまんねえなーとは思っていますね。

去年、審査員をされてみてどうですかというのがあったから、3000字ぐらいの大論文を送りつけたのですよ。こんなの販売促進にも結び付かないし、選ばれている作品は、うーん……。『凧のお暇』はいいよ、「凧のお暇」と「生理ちゃん」はいいんだけど、何かなという話をしたのですよ。こんなことを国民の税金でやるんだったら、やらない方がいいと思うんですけど書いて、これで私はお役御免だなと思ったら、「もう1回来年」と言われたので、「私の論文を読んだ？ やめようって私言ったんだよ」と、そんな経緯がありました。今年もやっていますので。

(倉持) 竹宮先生いかがですか。審査するという

(竹宮) 私のときには幸せなことというか、そういう問題作というのは目の前になかったので、これを推さなければと思うものはありませんでしたけれども、もしそういうことがあったら、やはり争うというのはなかなか大変ですよ。何とかしてそれを押し込もうという努力はするわけですよ、そういうところでは。ただ、本当にうまくいかないことが多いので、そういう世界では。やはりお国のお仕事だなという気はすごしますね。幸いにして私がやっていたときにはそういうことがあまりなかったので、割と妥当に決まりましたけれども、もし普通は選ばれないようなものが上がってくると、そこでどう決めるかというのはあります。

もちろん手塚賞とかそういうものだって、手塚治虫の賞であるということがすごく重要な部分です。それを感じずのものとして考えるということは、1回はありますよ。そういう意味で〇〇賞という名前は付いているわけですが、皆さんその賞の意義とかはあまり考えられないと思うのですが、私自身の中ではちゃんと認識されるものではあるなと思います。だから、難しいことがなくてよかったなと思っています。

(倉持) 最後に、お二人にこれからのお仕事についてお伺いしたいと思います。今後こんな作品を描きたいというようなことをお答えいただける範囲でかまいませんので、教えてもらいたいと思います。あるいは、この作品の続編を描いてみたい、といったものがあれば、教えてほしいと思います。

(西) 先ほども申しましたが、できれば、ゼネラルな描き手になりたいなと思っていて、小さい子が読むマンガも描けるし、お年寄りが読むマンガも描けるし、私たちマンガを浴びるほど読んだ世代も孫がいる時代にもなってきますから、読み癖が付いている方々の年齢がどんどん上がってくる。そういう方々のニーズに応えるというか、そ

ういう方々の心をどこかに持っていきような、「あなたたちはこういうものがあればいいでしょ」ではなくて、孫がいる世代になっても心を持っていかれるような、ズキズキするようなものを書いていきたいというのがまず一つあります。

それから、今朝教育テレビで「ピングー」を見ていて思ったのですけれども、本当に今日思い付いたのですよ。また「なかよし」で連載しようかという話になっているのですけれども、セリフがないマンガってやったことがないなと思って。「ピングー」は何を言っているのかが何となく分かるというか、お話が全部分かるのですよね。素晴らしいなと思って、久しぶりに E テレを見て勉強になってしまって、セリフのないマンガを描いてみようかなと。まずはそれを子供に読んでもらって、人の心を伝えるのに言葉ではなくて絵だけでストーリーを伝えられるという、マンガの最初のところに戻っていかうかなと、今二つ考えています。ゼネラルに全部描けるといふのと、セリフがないところで誰が見ても分かるものが描けないかなと。二本立てです。

(倉持) 竹宮先生はいかがでしょう？

(竹宮) 私はまだ具体的にこういうものを書いていきたいとかというのはないのですけれども、いったん一線を離れているので、逆に言うと提案的なものをいろいろ出していきたいなと思っていて。今は雑誌の上で発表しなくても、何とか個人でも発信できる時代なので、そういうことでちょっと試してみようかなと思っているところです。だから、どんな形になるのかも、自分ではまだまだ想像ができないのですけれども、やってみたいと思っています。

今、マンガの読みの話をされていましたけれども、トニー・ヴァレントさん作の「ラディアン」というマンガがありますよね。フランスで活躍するマンガ家が、BD 作家が日本風の描き方でマンガを描いて、日本でも出版しているわけなのですが、その中にあるオノマトペの描き方が変

## Records 2019

わっていて、オノマトペは日本語でないと表現できないものがたくさんあるのですけれども、その人は自分なりの工夫で、自分だけの文字で表現しているのです。だから、音ではないのですよ。日本人が読んでも、世界中の誰が読んでも、それははっきりした音にはならない。だけど、その人が表したいものを、「ピングー」の言葉のように描いてあるというマンガなのですよ。

私も「ああ、これフランス語じゃないんだ」と思いながら見ているわけですが、それをどのように皆さん読むのかが知りたいというところがあって。フランス人が描いているのだけれども、フランス語ではない文字で、日本の文字でもない、音を示したり状況を示したりするオノマトペが描かれているのですけれども、オノマトペがないと感じが出ないというか、スピード感が出なかったりいろいろするではないですか。そこに自分なりの工夫をしているわけですね、その人は。そういう変わったことができるのではないか、マンガはまだまだ開発できるような気がしているので、そういうことをやってみたいなど、ちょっといろいろ思っています。

(倉持) ありがとうございます。ちなみに、西先生が竹宮先生にこんな作品を描いてほしいというものを聞きたいですし、竹宮先生から西先生にこんなのに挑戦してほしいわというものがあれば聞きたいと思うのですが。

(西) まさに今お話になったようなものを、見たことがないものができるような気がするので、それはぜひとも。

(竹宮) はい。そんなものを作ってみたいなどは思っているのですけれども、どういう形でできるのか、今は全然、頭の中に具体的にあるわけではないので。

(西) ある日忽然と、ああ、これだと出てきたりしますから、そんな感じでよろしく願います。

(倉持) 竹宮先生はいかがですか。

(竹宮) 久しぶりに、自分の中から出てくるヒリヒリしたものというのを描くというのはどうでしょうか。

(西) 実はそれもやりたいのです。『flowers』では恋愛を描くと私は決めているのですけれども、そこからはみ出すものについては青年誌さんの方で描けないかなと。ドキドキではなくて、ズキズキもするものを描けないかなと。大人にならないと分からないところとか、そこを描けないかなというのも実はあります。

(竹宮) 何かヒリヒリする、傷口に塩を塗り込む感じの(笑)。

(西) 大人になったからこんなに痛いわという。子供は分かるまい、この痛みという。

(竹宮) そういうものをちょっと期待したいなと思います。

(西) ありがとうございます。

(倉持) ありがとうございます。これからのお二人の作品を楽しみにしたいと思います。フロアの皆さんからの質問をお受けしたいと思います。

### 【質疑応答】

(Q1) 竹宮恵子先生にお伺いしたいのですけれども、つい最近まで「きのう何食べた？」というドラマをやっていたと思います。ドラマの中でジルパールの画像や、似ている男性が出てきて「うわっ」って思い。竹宮先生は承諾されたのか、「何じゃこりゃ」と思われたのか、おうかがいしたいと思います。

(竹宮) よしなが先生にはお花を届けていただい

て。

(倉持) そうです。当館での展示の初日に竹宮先生のサイン会をやったのですが、そのときにお花と一緒に「画像許可いただいてありがとうございます」というメッセージが届いて。

(竹宮) ちゃんと許可を出していますし、ドラマの方は学長室にいたときなので、学長室長に話が来て、「ああ、いいです、いいです」と軽く許可したと思います。そんな感じです。あのドラマのおかげで、非常に私の評価が上がったという。私が住んでいる住宅地には、ドラマは見るけどマンガはあまり読まないという人達があります。だから私が何者かをあまりよく知らず、一緒に遊んでいるのですけれども、その人たちがドラマを見て、すごく盛り上がったというのがありました(笑)。

(Q2) 近年、一般の美術館でマンガ部門が設けられたり、イギリスで大規模なマンガ展が開かれたりしていると思いますが、こちらのようなマンガを専門とするミュージアムではなくて一般のミュージアムにおけるマンガというものを扱っていることについて、お二人はどのようにお考えでしょうか？

(竹宮) 読者の層が広がってきたということをつくづく感じています。大英博物館でマンガ展をやると聞いたときは、大丈夫ですかとやはり思いました。日本の中でそういうことがあったとしても、今となっては読者の層の厚さを考えると驚きませんが、大英といったら全然違う価値観のところかなと思っていたので。しかも、マンガは印刷物ではないですか。そういうものを展示していく。マンガというのは原画の価値みたいなので展示をしないですからね。もちろんたくさん原画も出ているのですけれども、印刷文化としての展示になっているので、そういうことでは珍しいことなのではないかというふうに思います。大英博物館のマンガ展は、それこそ本国のイギリスでも結構

物議を醸しているところがあるのではないかと思います。それはそれでマンガの運命なので、いいのではないかなと思っています。

(西) 私は去年、大英博物館に行きまして、ルーブル美術館にも行きましたが、普通に荒木飛呂彦先生の画集とかがドンと平積みで置いてあったりするのですよ。それから、今年になって、『ATOM』というフランスのマンガ専門雑誌の方から取材を受けたのですが、ライターの方が、『JUNE』に載っていたようなことを全部知っているのですよ。びっくりしました。何だろう、この関心の高さは、と。今は「お弁当」であるとか、「和食」であるとか、「お出汁」であるとか。「お出汁」を取るには「かつお節」なるものが要らしいということで、フランスにかつお節工場ができていたりもするのですよ。

私はヨーロッパを、毎年、東から西へ十数年かけてずっと横断中なのです。今はイギリスで、ウラジオストックからずっと電車で横断しているのですよ。あと10年かかるとは思いますが。それで感じるのは、ヨーロッパ・西欧社会は、日本というものを近代以降、もう一回発見したような状態にあるのではないかと思います。「極東」と呼び、自分たちと違うファーイーストだと思っていたオリエンタルを、第二世界・日本という国を発見したぞ、金があるらしいといわれていた時代から、もう一回、日本を発見した状態ではないかという感じをどこに行っても受けます。ものすごく珍しくて、知りたいとなると、本当にどんなことでも知りたい状態。例えば私たちが、マリーアントワネットがどういうスカートをはいていたかが知りたいような感じで、日本のことなら何でも知りたいという大発見期に入ってきたのではないか。歴史的には今そういう時期なのではないか、マンガもその一環になっているような気がします。

(Q3) お二人の先生に聞きたいのですけれども、マンガを描いてきてよかったと思う瞬間はどんなときですか。

(竹宮) マンガを描いてきてよかった。うーん、やはり全ての絵において、達成感があるということです。達成感というのは、忙しくて忙しくて仕方なかったときにはなかなか感じている暇がなくて、発表されてから2週間ぐらいたたないと達成感がないみたいな状態だったのですけれども、今は描く絵1枚1枚が仕上がるごとに達成感が感じられるし、物語を例えば作った時点で達成感を感じ、さらにそれをマンガという形にするためにコマを割るところにまた達成感があるし、何回も達成感があって楽しいなと思っています。

(西) うらやましい。

(竹宮) いやいや、忙しいだけだったのですよ、以前は。忙しい時期は、本当にそんなことを言っている場合ではなかったですからね。そういうのがあると思います。

(西) 私は経済的に自立できることだと。やはり自分のお金をちゃんと持てる。西原理恵子さんがおっしゃっていたのですけれども、「今日おすしが食べたいと思ったときにおすしが食べられる、この幸せを手放したくない」と、まさにそれといいますか。人の財布を当てにしたり、明日どうなるんだろうと思いつつながら暮らさなくてもいいということは、私にとって一番で。本当は他にもあるのですよ、いっぱいいろいろな要素があるのですけれども、一番大事なのは経済的に自立できたということで、それが私にマンガがもたらした最大の貢献かなと思います。

(Q4) 竹宮先生は、やはりジルベールを筆頭に美少年の礎を築いてこられたかと思いますが、お二人の美少年の定義なるものがあれば、教えていただけたらと思います。竹宮先生は、ジルベールを描かれた当時から、今変わっておられたら、そちらも教えていただけたらと思います。

(竹宮) ジルベールに関しては、きれいな少年なのだというのを、口を酸っぱくして言いましたけれども、果たしてそれが美少年であるかどうかに関して、私自身はまったく自信もないし、マンガ家って、詐欺にかけるようなものだと思うので(笑)。

(西) 私の心を返してください(笑)。

(竹宮) 詐欺にかけるようなものだと思うのですよ。だから、いかに美しいかということに言葉を尽くすことの方が大事で、私自身は描けてない、ここも描けてないという感じで実は見ているのです。形を見て本当にそれが美しいと皆さん思ってくれているのであれば、しっかり詐欺にかかっていたらいいなと思っています。

だから、このような形だから美しいというような定義は、実はありません。その人の性格によって、その人の形を決めていくわけですが、キャラクターを作るときにその人がどんな生活をしているのか、どんなことを価値があると思っているのか、それが崩れるときはいつなのかとかということをいろいろ考えながら作っていくのがとても楽しいです。だからそういうことがきちんと埋まっていくのが、私にとっては美少年なのだと思います。ちゃんとそれが埋まらないキャラクターもいるので、何か中途半端な出来だなと思う美少年もいるので、それが完成できたときに初めて美少年になるのだと思います。ジルベールは、描いてある形ではなくて、中身がちゃんとできているから、美少年だと思っています。

(倉持) 西先生は美少年の定義はありますか。

(西) あまり関心がないんですよ。

(倉持) では、美青年では？

(西) おじさんでもいいですか。

(倉持) もちろんです。「おじさま」の定義。

(西) どうでしょう、皆さん。私は俳優さんをあまり詳しく存じないし、特に外国の俳優さんに関しては名前も覚えられないのですけれども、ベネディクト・カンバーバッチはどうですか。私はああいう、どこかこの世ならざる者みたいな要素を持っている男性に、気が付くと心を持っていかれているふうはあります。どこを見ているか分からない目とか、何を考えているかが分からない表情とか、異常に白い肌とか、ああいうものを見ると、ふわーっと。その辺にいない要素を持っている人に、多分、強く引かれると思います。

(Q5) 西先生の素晴らしい仕事の割り振りをお聞きし、教えていただきたいのですが、ネームとペン入れ、下絵を時間で割り振っていくとおっしゃっていましたが、例えばネームの場合は、これがいけると思うシーンが思い付かなかった時、そして絵を描く場合はどうしても自分の思うような表情が描けない場合はどうやって自分で時間を区切っているのか、すごく気になりました。もしくは迷いが全てないのか、教えていただきたいです。

(西) ネームに描いたときの表情が、大体、正解だと思っています。99%ネームの表情が正解です。ただ、決めのシーンにもものすごく迷うときは、時々あります。そういうときには一回原稿を描いて、作画をして納品するまでの間に数日時間がありますから、または印刷に出るまでの時間までギリギリ考えて、これではないと思ったら「すみません、原稿を戻してください」というときはあります。それを思い付かないときには、最初に描いた仮のやつで、そのままいきます。

#### 【会場ざわつく】

(西) 何でざわざわするの。みんなそうじゃない

の？

(倉持) ないですよ。普通は。だから会場がざわざわしています(笑)。

(竹宮) 仕事をこなしている感じがすごいですね。

(西) 工場長ですから。

(倉持) 最後に先生方から一言ずつ頂いて、今日のイベントを終わりたいと思います。西先生からお願いします。

(西) 本日は暑い中、どうもありがとうございます。予定を超える人数に参加を頂いたということで、私も大変感激しております。今日は叱られずに済んだので、安心して帰ることができますが、こういう機会を設けていただかなければ長い間お話をすることもなかったと思うので、今日を宝物にして胸に秘めて帰ろうと思います。皆さんも心の中に持って帰っていただければと思います。ありがとうございました。

(竹宮) 西先生との対談というのは、実はこれまでほとんど他にはありませんでしたので、とても貴重な機会でした。このイベントをやる前に、西先生にはいっぱいひどいことを言った気がするのですが、きっと本人は恨みに思っているかもしれないから、ちょっとやばいかもしれませんという話もしたくらいだったのですけれども、今日お話をお聞きして、全然何も感じていなかったということで、すごく安心しました(笑)。本当に今日は皆さんも、それをきちっと覚えて帰ってください。どうもありがとうございました。

(倉持) 西先生は画業30周年、竹宮先生は画業50周年を迎えられたということで、お二人の活躍をますます楽しみにしております。今日はありがとうございました。